

デュルケーム・宗教社會學の構想

福井元澄

一

社會學が嚴密なる科學として確立せらるゝ爲には、それに獨自なる對象が有せられねばならぬ。その獨自なる對象を、デュルケームは社會的事實と呼んだ。然るに「通

例人々は、社會の内部に生起し若干の普遍性を以つて何

等かの社會的利害關係を示す現象であれば、その殆んどすべてに對して、社會的事實なる名稱を附する。」⁽¹⁾然しながら、若しかゝることが認容せらるゝならば、人間的現象にして社會的と呼ばれ得ざるものは結局あり得ない。従つて、社會學は獨自なる對象を有せずして、その領域は生物學心理學のそれらと混合さるゝことになる。デュルケームは、それ故に、先づ「社會的事實とは、固定せると否とにかゝらず、一つの外的拘束力を及ぼし得

る一切の作用様式である。」或は又「社會的事實とは一定社會の範圍内に於いて普遍的にしてそれ固有の存在を有し、諸多の個人的表示に對して獨立なるものである。」⁽²⁾と社會事實を定義することによつて、社會學の對象を決定する。

第一の定義に於ける非固定的なるものとは、未固化のもの即ち社會的潮流 *courants sociaux* の如き不定形的事實を云ひ、固定せるものとは、法律規定、道德規範、宗教々義、金融制度等すべて構成されたる諸信念及び諸慣行より成立せる事實を指し、更に又社會構成の要素的諸部分の數量及び性質、これらが配置さるゝ様式、これら要素の結合度、一定地域に於ける人口分布、交通機關の數及び性質、居住形式等の如き事實をも含む。この社會

構成に關する事實は、社會の存在様式 *manière d'être* 又は社會の形態學的事實と稱し得べく、これに對して法律規定、道德規範等の如き事實は、これを社會の作用様式 *manière de faire* 又は社會の生理學的事實と云ひ得るであらう。而してこれらの諸事實は、何れも、第一に個人より生起せずしかも個人に外在すること、第二に個人を外より拘束し強制する力を有すること、この二特徴を具有する。この二つの外部的特徴に着眼することに

よつて、一般事象より一群の限定されたるそれを社會學の取扱ふべき事實として識別せんとするのがデュルケーム社會學の出發點であるが、かゝる出發點の根據をなすものは彼の社會學の中心をなす理論、即ち各要素が結合して新現象を生起する時、その新現象は要素内に宿らずして結合の結果生じたる全體内に宿る、即ち個人の集合體たる社會は獨自性を有する綜合物であるが、この綜合物が孤立的なる個人意識中に生起する諸現象と異なる現象を生ずるならば、これらの獨自的諸現象は、當

然社會の諸部分たる諸成員の中に宿るものに非ずして、この現象を産出せる社會そのもの、中に宿らねばならぬ、これらの獨自的存在は、それ故に、かゝる意味に於いて孤立的にとられし諸々の個人意識に對し外在的である、かく個人意識に外在的であると共に、其は又、時空間に於いて且體統的地位に於いて優勝性を有する、この優勝性は必然強制力拘束力として個人の前に出現する、と云ふ理論である。

然しながら、かゝる特徴がしかく直接明瞭に、容易に、認め得られない場合がある。かゝる場合には一般性によるを便とする。但しこゝに注意すべきは、社會現象識別の標準としての一般的者とは、或る一つの現象が社會の各成員に共通であり一般的なるが故に、集合的であり社會的であると云ふ意味に於いては、なく、その一般的なるは集合的なるが故であると云ふ意味に於いては、あつて、一般的なるが故に集合的であると云ふこと、集合的なるが故に一般的であると云ふこと、は區別せられ

ねばならぬ。單に一般的と云ふ性質を具有することを以つてそれを社會的事實となすならば、其は社會事實とそれの個人的顯現 incarnations individuelles とを混合するものである。かくてこゝに「社會的事實とは、一特定社會の範圍内に於いて普遍的にしてそれ固有の存在を有し、諸多の個人的表示に對して獨立なるものである」と云ふ第二の定義が生れて來る。

かくデュルケームは、外在性と拘束性なる二特徴によつて識別せらるゝところの極めて特殊なる性質を具有する一定の事象に對して、社會的事實なる名稱を附與した。この事象は、表象と行爲とより成立するものであると云ふ點に於いて有機的現象より區別せられ、又外在性と云ふことによつて、個人意識内に又個人意識によつてのみ存在するところの心的現象より區別せられる。其は疑もなく獨自の事象であり、正に社會的と呼べる、ものである。

然らばデュルケームは、社會的事實を如何に取扱はん

とするのであるか。これに應ずるものは、「社會的事實を物 choses として取扱はねばならぬ」⁽³⁾と云ふ彼の根本規準である。こゝに物として取扱へとは、社會的事實を物質的な事物に還元すると云ふことではない。たゞ物質的な事物と同じく主觀に對立した一つの實在として取扱ふべきことを意味する。⁽⁴⁾即ち社會的事實は、我々のすべての先入見解を離脱したア・プリオリ的考察を排した恰も物理化學的現象を取扱ふ場合の如く客觀的態度を以つて觀察し實驗せらるゝことによつてのみ、その皮相なる外面より深奥なる内部が明瞭にせらるゝのである。

かく社會的事實を物として考ふることによつて、それに常態的なるものと病態的なるものとを區別し得る。デュルケームは、この常態病態の區別決定の標準をその事實の一般性に求める、即ち常態的社會的事實を普及性によつて決定し、これに反する病態的事實を、除外例たる偶發的性質によつて決定せんとしたのであるが、

此は更に彼の客觀的態度を徹底せるものと云へやう。ところで、社會的事實に就いてのこの常態的病態的の區別は社會的類型の決定を豫想する。ただし、常態的社會的事實を普及性によつて決定すると云ふことは、嚴密には或る一定の社會型を前提として始めて問題になり得るからである。デュルケームによれば、社會學當面の問題は實にかゝる社會的類型を決定することに存する。而してこの社會的類型の決定は、間接的實驗とも云ふべき比較法によらねばならぬ。社會學は歴史に比較法を施すことによつて、最初に最も簡單なる原始的社會型を把握し、それを出發點として漸次その複雑なる形態への理解に進むべきである。かくしてデュルケームは、社會の構成部分に分析し社會を破壊せざる程度に於いて基礎的社會型を決定し得るとなし、それを群又は氏族と認めた。而してこの全然特殊化のなき最も單純なる基礎的社會型を以つて、他の進歩せる社會形態を理解せんとするのである。

以上の如きデュルケームのかゝる方針は、異常なる努力の下に、又宗教現象の研究に適用せられた。

デュルケームによれば「宗教的表象は、集合的現象を現はす集合表象」⁽⁵⁾であり、宗教は正しく社會的事實である。其は、それ故に、法律や道德事實と等しく客觀的態度に基いて取扱はれねばならぬと共に、その科學的定義は外部的特性を擧示することによつてなされねばならぬ。元來神祕觀念を以つて或は又靈的實在の觀念及び神の觀念を以つて宗教を定義せんとするが如き、若干の宗教のみに共通する一特徴によつて一般宗教を律せんとするは誤りである。簡單なるものにして複雑なるものにして我々の知れるあらゆる宗教に同一なる一つの共通特徴が先づ探求せられねばならぬ。かゝる立場より考察すれば、宗教的信仰は如何なるものであれ、人間の表象する一切の事物を、全然相反する二個の種屬に分類することを豫想する。この二つのものは、一般に聖 *sacre* と俗 *profane* と云ひ得る。聖なるものとは、宗教的禁制

によつて擁護され隔離されてゐるものであり、俗なるものとは、この禁制が適用され聖なるものより引離されて存在するところのものである。宗教とは、聖なるものに對する信仰及び行事の連帶的一全體であると云ひ得る。更に云へば聖なるものに對する即ち隔離され禁止されたるものに對する信仰と行事の連帶的なる一體系であり、この信仰と行事とは一切の信者を教會と呼ぶる、同一の精神的社會に統一するもの、これ宗教である。⑥

宗教はあらゆる時代とすべての社會に存在するとし、
ても、今かゝる宗教の根髓を科學的に明瞭ならしむる爲には、その最も原始的なる且最も單純なる形態を取扱はねばならぬ。かゝる見解の下に、デュルケームは、原始宗教を探索してオーストラリヤのトーテムイズムに、その最も原始的なる形態を求めた。而して彼が特にかゝる原始宗教を選択せし理由に就きては、更に、第一、未開人の意識内容は、文化人のそれと比較して遙かに簡單である。未開人の個性は、未發達の段階にある。個人心は

團體心に包括され、その精神生活の大部分は即ち團體心の精神生活である。それ故に、個人心若しくは團體心の何れか一つを研究すれば、それと同時に他の精神生活の説明もつく。然るに文化人の場合はこれと異なる、即ちその個性は著しく發達しその宗教は又種々なる要素の結合して成立せる複合體である、かゝる錯綜せる状態に於いて一般に共通なるものを知ることは甚だ困難である。第二に未開人の宗教心は、文化人のその如く人爲的變更を加へられてゐることが比較的少ない。宗教現象以外のものが、宗教本來の性質を隱蔽することがない。従つて宗教を純粹なる姿に於いて見得る、と云ふ方法論上の理由を附加してゐる。それ故にデュルケームは單に原始宗教のみに止まるものでもなく、又徒らにかの劣等なる宗教に特殊の權利を與へんとするものでもない、すべての宗教に同一の理論的價值と確實性とを認め、一般宗教に普遍的なる根本原理を、原始宗教中に探求せんとするものなることは明白である。

- (1) Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique*, p. 5.
- (2) *Ibid.*, p. 19.
- (3) *Ibid.*, p. 20.
- (4) *Ibid.*, p. XI. *Le suicide*, p. IX.
- (5) Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*.
- (6) *Ibid.*, p. 65.

二

以上の如き研究方針の下にデュルケームは、當時宗教學界の興味を刺戟せるオーストラリヤのトーテミズムを社會的事實として攻究し、以つて宗教の社會生活の最も深い顯現であり本質的に社會的なることを實證し主張せんとするのであるが、それに先だちて、彼は先づ、在來の宗教研究の蒙を啓く、即ちマックス・ミュラー・キーン等の主唱するナチュリズム及びタイラー、スペンサーによつて支持せらるゝアニミズムを、共に宗教が如何にして發現せしやを説明し得るものに非ずとして退ける。宗教的信仰の起源を、自然の中に即ち人々が自然に對して有する最初の觀念の中に求むるは、誤りと云

デュルケーム・宗教社會學の構想

はねばならぬ。自然は決して宗教的情緒を喚起し得ない。宗教は又イリュージョンの上に基礎を置くものではない。夢やそれと類似の經驗より根本的宗教觀念は決して産出され得ない。所詮自然の奇觀も夢の錯覺も死の經驗も共に宗教に缺くべからざる聖の觀念を産み出し得ない。⁽¹⁾要するにそれらは、原始の哲學的世界觀たり得ても未だ宗教的觀念とはなり得ないのである。かくしてデュルケームは、ナチュリズム、アニミズムを退け、トーテミズムこそ眞に宗教の發生を説明するものであると主張する。

デュルケームがオーストラリヤのトーテミズムを以つて最も本來的なる宗教的複合體なりと見做す立論の根據は、明かに、マック・レナン、フレザー、エフ・ジェ・ジレン、ストレーロー等の詳細なる研究に負ふものであるが、其は二つの考へによつて支持されてゐるやうに思はれる。第一は、トーテミズムは氏族の上にその基礎を置く。然るに、氏族は最も原始的的基本的なる社會單位で

ある。それ故に、氏族の上に基礎を有するトーテムイズムは、又それ自身、最も原始的なるものでなければならぬと云ふにある。デュルケムによれば、オーストラリヤ

とする最古の社會組織と密接不可離の關係を保有するのである。

の部族は通例二個のフラトリー Phratric に分たれ、その中に諸種の氏族が存在する。フラトリーは古い氏族と考へらるゝものであり、現在の氏族は、フラトリー即ち往時の氏族の分裂の結果生ぜしものに外ならぬ。而して氏族の各成員は、一つの特別な性質を有する血縁關係によつて結合せしめられてゐると考へてゐる。この血縁關係は、相互に同一血族であると云ふことより生じ來たるものに非ずして、同一トーテムに所屬すると云ふことより結果せるものであり、しかも親縁に歸せられてゐると同一の義務、即ち扶助、仇討、復讐、服喪の義務、相互間に結婚せざる義務等を認めてゐる。氏族各成員の結合紐帶は彼等の有するトーテムであり、トーテムが血縁關係を支持する。従つて各氏族は、トーテムなくしては相互に區別し得ず、實にトーテムイズムは、氏族を基礎

第二は、トーテムイズムはかく原始的なるものである一方、又宗教の成立に缺くべからざる聖の觀念即ちトーテム徽號、氏族の名稱となれる動植物及び氏族の成員なる

三種の聖なるものゝ觀念を所有し、しかも又高等宗教のあらゆる特長化せられた面影を有すると云ふにある。デュルケムによれば、トーテムとは單なる名稱に非ずして宗教的標章である。それ故に、それが表現せられたるものは如何なるものにもあれ、常に聖なるものであり、俗なるものより隔離せらるゝと共に、集團がその成員に對して所有すると同一の權力と威嚴とが賦與せられる。従つてトーテムを表象する或る動植物及び事物が又聖視せらるゝに至り、最後に人間も亦動植物と同一資格を以つてトーテムの神聖性に參加せしめられる。ただし人格を神聖視する理由は、普通人間と云ふ意味の外に、トーテム種族の一動物であると思考せらるゝからである。

更に又オーストラリヤに於いては、宇宙間に於けるあらゆる一切のものは、部族の諸部分として思考されてゐる。萬物は部族の構成要素であり成員である。萬物は、それ故に、社會の框の中に決定せられた地位を有する。一方彼等は又、あらゆる一切のものをトーテムに結びつけ、而してそれらに宗教的性質を賦與してゐることは注意すべきことである。ギリシヤやローマの宗教に於いては、諸神は自然現象の特殊の一部門を管掌する。然るに彼等の社會にあつては、トーテムがそれらの神々と同様なる役割を演じてゐる。即ち十氏族を包含する部族に於いては、世界のあらゆる事物はすべて十種に分割され、その各々は十個のトーテムの何れかに所屬する。而してこのものは、その本體も生命も共に、トーテムより引出されてゐるのである。(2)かくオーストラリヤのトーテムズを精細に検討すれば、外見は然らざるもかなり複雑なる宗教である。

デュルケームは、かくの如くして第一、トーテムイズム

の最も原始的社會型たる氏族と密接不可離の關係を保有することより前者の原始的なることを論證し、第二、聖なる觀念を有することよりその宗教たることを主張せんとするのであつて、彼は社會生活の起原をこゝに見出すと同時に又宗教の起原をこゝに探らんとするのである。

(1) Halbwachs, Les origines du sentiment religieux d'après Durkheim, p. 22 ff.

(2) *Ibid.* pp. 61-62.

三

然らば、宗教の共通特徴たる聖なる觀念とは如何なるものであらうか。

デュルケームによれば、あらゆる宗教的信念は、單純なるものにしる複雑なるものにしる、すべて同じ共通特質を示す。即ち人々が表象する實有上又は理念上の事物を、二つの階級又は相反する二つの屬に分類することを豫想してゐる。此は一般に俗及び聖なる二用語で指名される。世界を、一はあらゆる聖なるもの他はあらゆる俗

なるものを含む二領域に區別することは、宗教思想の著しき特徴である。(1)「聖なるものとは禁制 interdit が保護し孤立せしむるものであり、俗なるものとはこの禁制が適用され前者より隔離されたものである。」(2)而して聖と俗との二者は「全然相異せる二つの世界であり、互に乖離 antagonisme の状態にあつて同じ強さで同時には存在し得ない」(3)のものである。而して聖なるものを、神又は靈と呼ぶ人格的存在とのみ解してはならぬ。岩、樹、礫、木片等如何なるものでも聖たり得る。要するに聖なる事物の具體的内容は、各宗教の異なるにつれ、限りなく變化する故、その範圍を一樣に決定し得ないが、宗教の一般特質は實にこゝに存するのである。

右によりて明なるが如く、神聖觀念は、禁止或は隔離の觀念に外ならぬ。然るに魔術も亦宗教と同じく明かに一種の禁制を有する。兩者は屢々混合され勝ちであるがデュルケームは二點よりこれを區別する。第一は制裁上に於ける相違である。即ち宗教的禁制の冒瀆者は、直ち

に病氣或は死によりて罰せらるゝと考へられ、しかも衆人より絶交され指彈を受く。然るに魔術的禁制には、かゝる罰或は社會的制裁はない。たとひそれを冒すとも、其は醫師の忠告に従はざる病人の如く自得の危險に落入るに過ぎない。第二は禁制の本質に於ける相違である。宗教的禁制は必然的に神聖なる觀念を含む。此は神聖なる對象によりて喚起せられたる尊嚴より來るものであり、その目的とするところは、その尊嚴を失墜せざるやう保持するにある。これに反して、魔術的禁制は、或る事物に對する尊嚴より由來せしものでなく又それが俗化せらるゝことを恐るゝ爲にも非ずして、單に一時の實用の爲に外ならない。換言すれば、前者は聖なる無上命令であり、後者は單なる實用上の規制に過ぎないものである。(4)

さて然らば、神聖觀念の特質たる宗教的禁制は、事實如何に規定されてゐるのであらうか。デュルケームによれば、二つの形式が見出される。

第一の形式は、あらゆる一切の俗なるものよりあらゆる一切の聖なるものが區別されるゝところの嚴重なる且典型的なる宗教的禁制であつて、種々の禁制は殆んどこれより派生されたと見做し得る。而してこの區別は、兩者の絶對的なる異質性によるものであつて、「人間の思想史に於いて、かくも深く分化し、かくも根本的に對立せし事物の二つの範疇の例は他にない。傳統的なる善と惡との對立も、これに比すべくもない。何となれば、善と惡とは、健康と病氣とが生命なる同一事實の異なる二部面に過ぎざると同じく、道德なる同一屬の類を異にせる二つに過ぎぬからである。然るに聖と俗とは常に至るところに於いて區別せられし屬であり、相互に何等共通なるものを有せざる二つの世界である。」(函従つて、

兩者は決して混合接觸を許されない。單に同一場所に於いてのみならず、同一時間に共存することをも禁止される、即ち時空間上に於いて嚴重に規定され制約されるのである。たとへば、アルンタ族がその祭式に使用するチ

ユリンガ churinga は、あらゆるものゝ中でも特に聖なるものとされて居り、従つて俗なるもの即ち女子や入社式 initiation を行はざる男子よりは嚴重に隔離され、彼等がチユリンガに觸るゝことも見ることも許されざるは、かゝる禁制に基くのである。

第二の形式は、二つの異なる方面に屬するところの何れも神聖なる事物を相互に區別せんとする宗教的禁制である。即ち清淨なる神聖 *sanctum* と不淨なる神聖 *profanum* との接觸を防ぎ、兩者を隔離せんとするものである。等しく神聖と稱せらるゝ中にも善なる清淨なる方面と、惡なる不淨なる方面とが考へられねばならぬ。後者は所謂宗教的惡とも云ふべきものであり、一般に死病氣、災害等の原因と考へられ、恐怖、嫌惡の對象となるものである。多くの宗教は、これを屢々惡魔、惡神の形に於いて具體的に表現せしむると共に、一方前者を守護神として顯現し對立せしめてゐる。而してこの第二の形式に於ける禁制は、第一の場合に於けるが如き絶對的

なる異質性より來るものに非ずして、等しく神聖なる事物間に於ける差異を認むることより來るものであり、神聖なる事物相互間の或る關係を規定するに止まる。「清淨なる神聖と云ふも不淨なる神聖と云ふも、其は隔離せられたる異種のものに非ずして、等しくあらゆる神聖なる事物を包含するところの回種の二面に外ならぬ」⁽⁶⁾のである。従つて不淨なる事物は、單に外的事情の變化によつて、その性質を何等變することなく、聖なる事物となり得る。それ故に、この種の禁制は宗教的ではあるが、その本質的のものではない。

神聖と卑俗とは、かくの如く相互乖離の状態にあり嚴重に分たれ對立するが、然しながら兩者は、全然平行線状態に終るものではない。神聖觀念はその中に特殊の排他的性質を有すると共に、又他面、それと相容れざるが如き他の性質をも有する、即ち神聖は一方卑俗を隔離するにもかゝらず、他方卑俗そのものゝ中に積極的にそれ自らを擴張せんとする傾向を有し、卑俗を反撥すると

同時に、それに接近するや否や、その中に流れ入らんとするのである。デュルケムはこれを神聖觀念の傳播性 *contagiosité du sacré* と稱する。オーストラリヤの土人間には、彼等の祖先の靈が住むと考ふる場所にあるナンジャの木は神聖なるものとされてゐるが、若しこれに鳥が止まれば、その鳥は直ちに神聖なるものとされ、嚴重にそれへの接觸を禁止さるゝのである。のかく俗なるものが聖なるものによつて聖化さるゝことは、同時に他方俗による聖の俗化を意味する、聖と俗とが相互に隔離せらるゝ理由はこゝに存するのである。然らば、この傳播性そのものは如何に説明せらるゝのであらうか。デュルケムによれば、我々は神聖觀念を、事物そのものに内存し且事物の構成要素或はその結合部分と考へてはならぬ。若しかく解するならば、我々はしかく容易にこの觀念が他に傳播するとは考へ得ない。此は熱や電氣の如く我々の外部より與へらるゝものであつて、かくてこそ彼等の可動性は容易に説明せられ得る、⁽⁷⁾ 即ち或る事物

の有する神聖性は、全然外部より附加されたものであり自然の事物中に固定せる性質ではない。或る想定された純内的な信念とも云ふべきものであつて、其は、それ故に、一切の事物に傳播し、これを聖化し得るのである。

以上の如く、神聖觀念は乖離性及び傳播性を有し、この兩性質によつて自らを發展せしむる。而して乖離の規定せらるゝ所以は、傳播性を有することによる。それ故に乖離性は傳播性を豫想し、他方傳播性は乖離性によつて始めてその意義を有するものであつて、この兩性は共に、神聖觀念の重要な特質をなすものと云ひ得るであらう。而してこの乖離性と傳播性とを基礎として、こゝに種々なる一定の行動様式即ち宗教的儀禮が生まれる。デュルケームは、これを消極的儀禮 *culte négatif* と積極的儀禮 *culte positif* とに大別する。前者は聖と俗との嚴重なる隔離を實現せしめんとする種々なる儀禮であり、後者は聖と俗とを融合せんとする儀禮である。固よりこの二者は相互に他を豫想するものであつて、實

際には密接に關聯することは云ふまでもない。

- (1) *Les formes élémentaires*, p. 50.
- (2) *ibid.*, p. 56.
- (3) *ibid.*, p. 453.
- (4) *ibid.*, p. pp. 449—450.
- (5) *ibid.*, p. 53.
- (6) *ibid.*, p. 538.
- (7) *ibid.*, p. 455.
- (8) *ibid.*, p. 461—462.

四

上述の如く、神聖觀念は外部より與へられたる禁制の觀念であり、而して事物に表象せられて集團がその成員に對して持つと同様の權力と威嚴とを有し、従つて又強制力を有するのであるが、然らばかゝる神聖觀念は如何にして發現し來るのであらうか。デュルケームは、その根拠をトーテムイズムと呼ぶるところのすべての信仰を説明するに足る共通なる原理、即ちトーテム的原理 *principle totemique* に求める。トーテムイズムに於いて、トーテム徽號、氏族の名となれる動植物、及び氏族成員

の三種の聖なるものゝ存在することは、既に述べた。然るにこれらのものが、何れも聖なるものとしての資格を有するに至りしは、人々によりて尊敬されたり、畏怖されたりする爲に非ずして、これらの事物或は生物に共通なる何ものかの存在することによる、換言すれば、これらのものに先だちて存在し、これらのものゝ亡びたる後も尙殘存して、常に宗教的感情を喚起せしむるところの一種の方の存在によるとみななければならぬ。この力が即ちトーテム的原理である。然しながら、「この非人格的なる力を、オーストラリヤ人は抽象的なる形態に於いて表象はしない。彼等はこれを動植物の類、約言すれば感覺的事物の種類として思考する。そこにトーテムは實際に如何なるものより成立するか存する。即ちトーテムとは、この非物質的なる本體このあらゆる種類の異質的事物を通じて傳播せるエネルギーが想像に再現せらるゝところの物質的形態に過ぎない」のである。原始社會の多くの事物には、本來一種無名の力が内在する

と思考せられてゐるのであるが、然しながら、この力が極めて茫漠たる觀念として多くの事物又は活動に意識さるゝに止まり、未だ一定の對象に限つて常に表象されざる限り、神聖觀念が喚起されたとは云ひ得ない。然るにかゝる不定にして集合的なる一種の力に對する漠然たる觀念が、特に一定の對象に強く集中され表象せらるゝ時、そこに初めて神聖觀念の發達が促される、即ちその對象となりし事物は全くその力の維持者なるかの如く見做され、やがて神聖視さるゝに至るのである。而して我々は「このトーテム的原理を、それらは力であると云ふ時、その語を比喩的に受け入れてはならぬ。それらは眞實の力として働くのである」或る意味に於いて、この力は機制的に物理的效果を産む物質的なる力であると思考されてゐる、即ち電撃とも云ふべき一種の衝撃を人間に與ふるものであり、若しもこれを受容するに價せざる者に誘導されば其は自動的反應によりて病氣或は死を惹き起すのである。人間以外に於いてはこの力

は、生命原理の役割を演ずる。種の繁殖が確保され、宇宙生命の落つき得るのはこの力によつてであると考えられてゐる。かくの如く物理的性質を有するのみならず、この力は又同時に、道德的特質をも有する。元來オーストラリヤ土人がトーテム的存在を尊崇する所以は、單にそれらに物理的に恐るべき力が存在するのみならず、道德的にかく振舞はねばならぬ一種の命令に服し義務を果すと云ふ感情を有するからであり、同じトーテムの原理の中に於いて交通してゐるあらゆる一切の存在は、それによつて相互に道德的に結合せしめられてゐると見做してゐるからである。従つてトーテムの原理は、物質的なる力であると同時に精神的威力である。(3)

然るに、かくの如き力に對する觀念は、又他の原始社會に於いても、これを見出し得る。たとへば、アメリカインディアンのスー族のワーカーン *wakan*、イロクワ族のオレンダ *orenda*、アルゴンキン族のマニトウ *manitou*、トリキント族のイエク *yeke*、ハイダ族のスガーナ *sgana*

と呼べるもの等は、殆んどこれと同一である。然しながら、この種の方の觀念に對する最初の研究は、メラネシヤ人に就いてであり、彼等の間にはマナ *mana* なる一つの力が信ぜられてゐる。これを最初に研究せるコッドリントンの定義によれば、マナとは、物理的力より絶對に區別された一つの力である。其は善にも惡にもあらゆる方面に働き、この力を持ち又は支配するものは、非常なる利得を得る。この力は、本來物理的に非ずして一種の超自然力である。しかしながら其は又物理的力となりて現はれ、且人間が有するあらゆる種類の力若しくは優越性となつて出現する。マナは一定のものに固着しない。あらゆるものによりて運ばれる。一切のメラネシヤ人の宗教は、事實自らを益し又他を益する爲にマナを獲得するにある。(4) 以上によつて知らるゝが如く、マナは無名の力の觀念であり、非人格性を有し、徧在性を有する、論理的範疇によりて働かざる一種の集合的勢力又は活動力とも云ふべきものに外ならぬ。然らばこのマナとト

トーテム的原理とは、如何なる關係を有するのであらうか。

デュルケームによれば、オーストラリヤに於いては、少なくともトーテム禮拜に於いては、マナに比較せらるべき特異なる且普遍的なる力の觀念は見出されない。其は單に、オーストラリヤ人が有する抽象化及び普遍化の能力の不充分さによるものに非ずして、オーストラリヤの民族的トーテムイズムが禮拜的組織の上に立つてゐることに起因する。それ故に或る意味に於いては、トーテム集團は、部族的教會の禮拜堂に過ぎぬとも云ひ得る。然しながら、其は全く獨立の禮拜堂である。或る民族のトーテムは、その氏族にとつてのみ、完全に聖である従つて、各氏族に屬し又人間と同じくそのの一部をなしてゐる事物の集團は、同一の個性と自律性とを有する。それらは何れも他の類似の集團に還元し得ない。何となれば、それらの異質界は同一なる力の夫々の表現とは考へられずして、反對にそれらの異質物及び各氏族の成員

に一つの特異なる原力を賦し、その力の作用は到底他物に及ばないと思考するからである。従つて、獨自にして普遍的なるマナの觀念は、氏族の宗教が氏族の禮拜を超えて發展し、それらを多少とも完全に抱括する曉に非ざれば發現し得ない。換言すれば、部族的統一の感情は、世界の實質的統一の感情が生起せざれば發現し得ないのである。オーストラリヤのトーテムイズムが未だ主として氏族の宗教に止つてゐるのは、以上の理由によるものと思はれる。(5) それ故に、マナとトーテム的原理との間には何等性質上に於ける差異はない。たゞマナは全宇宙に徧在するものであり、トーテムの原理は氏族の範圍を脱せざるところにのみ、兩者の差異が存するに過ぎないかくて我々は、トーテム禮拜は特定の動植物若しくはそれらの類に對して行はるゝものに非ずして、諸物を通じて散在する一種の漠然たる力に對してなされることを知るのである。

(1) Les formes élémentaires, p. 270.

- (2) *Ibid.*, p. 271
 (3) *Ibid.*, p. 271—272.
 (4) Codrington, *The Melanesians*, p. 118 (*Les formes élémentaires*, p. 277 參照)
 (5) Halbwachs, *Les origines du sentiment religieux*, pp. 78—79.

五

以上の如くデュルケームは、神聖觀念發現の根源をトーテムの原理に求め、個々の聖なるものは要するにこの力の個別化せられたる形式に外ならぬとするのであるが、然らば宗教の基礎たるかゝる非人格的なる力の觀念は、何處より由來したのであるか。オーストラリヤ人は、かゝる觀念を何處より抽出して來たのであるか。この力そのものは、一體何處に存在し又如何にして構成されたのであらうか。これ次に來るべき問題でなければならぬ。

デュルケームによれば、右の非人格的なる宗教的力を他の事物より人間及び動植物を區別するところの特異なる屬性に歸するは誤りである。人間を人間それ自體に

即ち物理的屬性に還元するならば、全く無價値なものとなる。個人は彼特有の諸力に還元されたる時は、只自己の弱小を感ずるのみである。又トーテムとして使用せらるゝ動植物は目立たぬものが多く、それらは日常生活に於いて強き印象を残し得るものではない。従つてかゝるものを、聖なるものとして他の俗なるものより區別する理由を解し得ない。然しながら既に述べた如く「禮拜の中心は他に存する、即ち最高の神聖性を所有するものは動植物の繪畫的表現であり、あらゆる種類のトーテム徽號とシンボルとである。それ故に宗教性の源泉はこれらの中に存するのであつて、これらの徽號が表出してゐるところの實際の對象は、この宗教性の反映たるに過ぎない」のである。

事實トーテムは、明かに二種のものゝを表明してゐる。一方其はトーテムの原理即ち神の感性的な外的形態であると共に、他方其は氏族と呼ぶる、特定社會のシンボルでもある。即ち其は氏族の旗であり、各氏族が相互に

他を識別する爲の徴であり、氏族自身の個有性の明白なる印である。それ故に若しそれが、神即ちトーテム的原理のシンボルであると同時に社會のシンボルであるとするならば、神と社會とは同一のものではなからうか。

集團と神性とが各個の二實在ならば、如何にして集團の記號が神の畫像となり得たであらう。氏族の神即ちトーテム的原理は、從つて氏族そのもの以外ではあり得ないたゞトーテムとしての役をつとむる動植物の可見的な形態をとつて神格化され想像に表象されたに外ならぬのである。(2)

一般に社會は、人々の精神に神的なるものゝ感覺を喚起せしむるに必要なものを一切所有してゐる。何となれば、社會がその成員に對する關係は、神がその信者に對する關係と同一であるからである。事實、神とは、人がある方面より自己よりも優越なるものとして表象し且又これに依存してゐると信じてゐる存在であるが、社會も亦我々に永久的依存の感を與へる。(3) 社會は我々を

社會生活に必要なあらゆる種類の束縛、不便、犠牲にまで拘束するのみならず、時には我々の性向や本能に反しさへもする行爲及び思惟の規準への服従を強要する。神は又我々の尊崇するものであるが、此は神が單に我々より優越であると云ふのみならず、我々がこれに偉大なる精神的權威を賦するからであつて、實に「尊崇とは、精神的なる內的強壓が我々に生ずることを我々が感ずる時に經驗する情緒である。」(4) 然るに輿論は權威の源泉であり、同様に我々に尊敬の念を抱かしむる一つの特權を有してゐる。然しながら神は我々が依據するところの權威たるのみならず、其は又我々のすべての力の根源である。神に服従し自己と共に神を有すると信ずるものは信賴と活氣とを以つて生活する。然るに社會も亦、我々が社會より引き出したあらゆる力を成長せしめ、我々を眞の人間たらしめる。即ち社會は個人意識の中にのみ又個人意識によつてのみ生存し得るを以つて、當然其は我々に透徹して組織化し、かくして社會は我々の存在の集

成的部分となり、又これによつてこの存在を哺育し成長せしむるのである。(6)かくの如く單に我々が一社會の成員であると云ふ事實より、我々を支配すると同時に我々を保護し、我々に命令的であると共に我々にとつて救濟的なる力の觀念、換言すれば宗教的力の觀念を所有することになるのである。

以上の説明は然しながら餘りに一般的である。何となれば、其はあらゆる種類の社會従つてあらゆる宗教に適用さるゝからである。デュルケームは、それ故にかゝる状態が氏族に於いて如何なる形態をとるか、且又如何にして氏族が、その成員に働く様式によつて、氏族を支配し高揚せしむる外的なる力の觀念を彼等に喚び醒すかを説明する。

オーストラリアの社會生活は、二種の異つた形式に於いて交互に行はれる。或る時には人口は小集團に分散し互に他の集團と獨立して狩獵魚撈に従事して生計を營む。或る時には、これに反して人口は一定の地點に數日

乃至數ヶ月間集合する。この集合は、氏族又は部族の一部が招集されたる時に起る。この場合彼等は、一種の宗教的祭儀を行ひ又はコロボリー corroboree を開催する。この二つの時期即ち分散期と集合期との間には、著しい相違が見出される。分散期に於ける彼等の生活は一様に單調であり、不活潑、沈滞且無趣味なるに反し、集合期に於いては、單に集合したと云ふ事實より、彼等の心中に異常なる刺激が與へられ強い感情が生れる。即ち單調なる日常の經驗は變じて情熱昂奮のものとなり、彼等は、平時とは異つて考へさせ働かせる一種の外的力に支配され指導されてゐることを感じて別人の感銘を受ける。かゝる經驗が數週間を通じて行はるゝ時は彼等に二つの異質の世界が存在すると云ふ信念を抱かしむるに至る。即ち一つは單調なる日常の生活であり、他はそれとは全然異なる異常な威力に圍まれた他の世界である。彼等にとつては分散期は俗なる世界であり、集合期は聖なる世界である。事實宗教的觀念が生れたの

は、かゝる社會的環境に於けるかゝる集合的感情そのものからであつて、オーストラリヤに於ける固有の宗教的活動は殆んど、これらの會合が行はるゝ時に集中さるゝのである。(6)

然しながらこゝに、若し氏族が彼等にとつて神であり而して社會生活が集中し集合的感情が強めらるゝ宗教的集合に於いて神が現はるゝならば、何故彼等は、氏族そのものを禮拜しないのであらうか。又何故に彼等は動物の形をかりて氏族を表象し、氏族そのものゝ爲に非ずしてかゝる象徴物の爲に禮拜するのであらうかと云ふ問題が出て来る。

デュルケームによれば、氏族は、單純なる智能の所有者たる原始人がそれを具體的なる統一に於いて鮮明にするには、餘りに複雑な實在であり、且彼等は、彼等の有する強き印象が集合性に起因することを知り得ない。而して彼等が、彼等の受けし印象をすべて動植物に結びつける所以は、これらの動植物がその名を氏族に與へ而

して氏族の徽號となつてゐることによる。(7) 元來氏族は酋長を以つて定義づけられない。何となればそれに中心的權威が除外してゐないにしても、其は氏族にとつては不確實であり不安定のものであるからである。尙又氏族の占むる地域によつて決定さるゝこともない。けだし氏族の成員は一定の地域に定住しないからである。しかのみならず外婚法則の爲、夫婦は義務的にトーテムを異にするからである。かゝる理由によつて、我々は同一家族内又は同一地方に於いてさへも、種々の氏族のあらゆる異つた表象を發見する。それ故に集團の統一は、氏族の全成員が帯びてゐる集團名及び全成員を周圍に集むる徽號によつて行はるゝのである。而してこれらの徽號が、殆んど排他的に動植物特に動物に選擇せらるゝ理由は、それらは彼等の日常生活に密接に關聯し、殊に動物は、彼等の經濟的環境の本質的要素をなすからである。(8) 而してトーテムは氏族の徽號であり又一種の旗なるを以つて、原始人が氏族そのものによつて彼等の心内に生

せしめられた種々の感情を、かゝる徽號に關聯せしむるのは自然である。何となれば集團や集團が我々に及ぼすところの複雑な作用を想像するよりも、簡單なる對象の想像がより容易であるからである。かくの如く徽號は事物の代用となる。原始人が宗教的祭儀に於いて彼等の周圍に眺むるもの、感覺に映するもの、注意を惹くものは、多數のトーテム形象であり、聖なるもの、シンボルたるチュリంగాであり、身體の諸部分に畫けるトーテム的裝飾である。これらのものは反復出現する、が故に、そこで經驗された感情は、この上に密着されるかくして彼等は、氏族が中心であり根源であるところの一切の力をトーテムに歸するに至るのである。結局宗教力は氏族の集合力以外のものでなく、又後者はトーテムの形態の下に於いてのみ精神に表象する、が故に、トーテム徽號は神の可視的な姿の如きものであると云へやう。かくみ來れば宗教の根底に横はるものは社會に外ならぬのである。

- (1) Les formes élémentaires, p. 294.
- (2) *ibid.* p. 295.
- (3) *ibid.* p. 295.
- (4) *ibid.* p. 297.
- (5) *ibid.* p. 299.
- (6) *ibid.* p. 307 ff.
- (7) *ibid.* p. 314 (以下 Les origines du sentiment religieux, pp. 87—91 參照)
- (8) *ibid.* p. 324.

六

以上述べ來つた如くデュルケームはオーストラリアに於けるトーテムズムを以つて宗教の最も原來的なる形態なりとし、これを社會的事實として検討しあらゆる一切の宗教に同一なる共通特徴たる神聖觀念發現の地盤を求めて、所謂歴史上漠然たりし宗教力の即ち集合力に外ならぬことを科學的に實證せんとしたのであるが、然しながらこゝに注意すべきは、上述するところによりても略察知せらるゝが如く、かゝる集合力はそれ自身既に理想的なるものを含まなければならぬ、即ちかく宗教

に於いて認めらるゝ社會觀念は本質上理想的社會でなければならぬと云ふことである。デュルケームによれば、かく宗教の根底をなすところの社會は我々の眼前に展開せるが如き現實多數個人の集合せる社會ではない。⁽¹⁾多數者の意識或は平均意識は嚴密に集團意識と區別せられねばならぬ。若し社會を單に多數の個人が集合し協同せる團體に外ならずとし、而して集團意識とは單にかゝる團體の平均意識又は一般的なる意識に過ぎないとみるならば、かゝるものより宗教意識が喚起せらるゝとは考へ得られず、従つて各個人に尊敬を強ふるところの神聖觀念特有の威嚴や義務觀念は、何處より來たるかを解し得ない。集團意識は一般的なる意識又は平均意識ではなくして、個人意識に内在はするが、しかも個人意識を超えてこれを養ひこれを高揚するもの、それ故に個人意識に對して精神的權威を有し理想化して映出されて來る、従つて個人を強制し拘束するのである。要するに集團的なるものは現實的にして同時に超越的な

るものであり、個人に模範として作用する理想の總體を包含する。個人はこれによりて經驗の世界以上に向上せんとする要求を感得せしめらるゝと共に、これによりて示された理想を體現することによりて始めて自己の理想を認むるのである。かくの如くデュルケームに於いては集團的なるものは一つの理想的なるものであり、従つて又彼がこゝに意味する社會は實に理想的社會に外ならぬのであるが、こゝに於いて社會的事實を物として扱ふと云ふ規準に立つて純科學的態度より出發せるデュルケームが、多少とも形而上學的態度に到つてゐると云ふことは、否まれないであらう。

(1) Les formes élementaires, p. 600

デュルケームが宗教現象の研究に與へた影響と貢獻とについてはこの云ふまでもない、がそれだけ又少なからぬ非難と難點とがあげられてゐる。今それらの問題に一々ふれて吟味論述するの選なく、たゞその主流を探りて敘述せしに止りしを遺憾とする。